

人間万事塞翁が馬ハ年間の鬪病生活の後、損保代理店に活路を見い出す

九州支店営業第二部 久留米支社

ハシモト保険センター

橋本秀雄さん



昭和40年頃の橋本さんと奥さま。
中央は高校生の長男健男さん。

27歳

困ったのは、教え子たちに軍需工場推薦のほか、満州開拓義勇軍や少年航空兵などの志願を勧めなければならなかつたことである。しかし、教え子たちを無理して満州に送り出すことなく済んだのは、今になれば幸いだつた。しかし、戦雲は日に日に重く、暗くたちこめるようになり、私も召集される時がきた。20年3月、私は一枚の召集令状で済州島へ。済州島では、時には戦車刺突爆雷攻撃などの肉弾訓練を行つたが、ほとんどは陣地構築に明け暮れ、幸いにしてこの地は戦場とはならず私は20年10月、無事復員することができた。

昭和21年

復員と同時に前職の小学校に復職した私は、翌年の21年12月、妻イツヨと結婚した。イツヨは私とはい

物資欠乏の時代に結婚花嫁は人力車に乗つて

この間柄。一人の結婚を勧めてくれたのは、当時、イツヨが勤めていた郵便局の局長さんであつた。

彼女は、両親から贈られた久留米がすりや銘仙の着物などの入つたタンス、長持など、当時としてはぜいたくと思えるほどの嫁入り道具とともに人力車で嫁入りしてきた。が、当時は終戦間もないこともあって極端

30歳

結核にかかり
鬪病生活に入る

昭和24年

に物のない時代。二人の結婚式は、お祝いの酒もつかないまことにつまりものであり、新婚旅行は米を持参して出かけたものである。物不足といえど、新婚当初はコッペパンも配給制だつた。ところが妻はコッペパンが大嫌い。とても食べられないという。そこで私の分の米を妻に食べさせ、私はコッペパン、コッペパンの毎日。しかし、それを辛いと思つたことは一度もなかつた。今はただただ懐しい思い出である。妻は結婚と同時に郵便局をやめて家事に専念。22年には長男健男が生まれた。わが家は幸福いっぱいだつた。

ところが、この幸福一家がある日突然、思いもかけぬ不幸を背負うことになつたのである。

昭和22年4月、新制田代中学校に転任。私は終戦後の教育制度の下で、これらの人生を子供たちの教育に捧げ

38歳

損保代理店として
第二の人生を始める

朝は小学校、昼は中学校、夜は婦人会などに出かけ映画会を開く仕事だ。それも遠く離れた村から村へと巡るのである。そして夜は、破損したフレームの修繕が待つてゐる。この作業で夜を徹することも度々だつた。

この時の過労がたたつたのだろう。忘れもしない。24年5月のある日のこと。私は医者から肺結核を患つていることを宣言されたのだ。

この日の日から八年間、私は結核療養所で鬪病生活を送ることになる。一家の大黒柱である私が倒れたことで妻は、二歳の長男をかかえて再び郵便局の勤めに出た。しかも妻は自宅わきの小さな畑を耕し、そこでできる野菜などを売つて生計を補わねばならなかつた。また、余分な家計費を使うまいと味噌や醤油は妻の手作り。そして毎週土曜日には決まつたように「病気には滋養をつけるのが一番」と刺身や卵を持つて療養所に見舞いにきてくれたものだ。

この頃の妻には、郵便局の仕事や子育てで疲れた体を休める暇さえなかつたに違ひない。

20歳

昭和14年
小学校教員に奉職、
召集を受け済州島へ

私は大正8年1月、佐賀県の鳥栖市に生まれた。小学生の頃は病弱だったが、昭和12年、久留米の明善中学を卒業。その後、父親の勧めもあって佐賀の師範学校に進んだ。

昭和14年3月、師範学校を卒業と同時に隣町の田代小学校に奉職したが、実際は4月から8月までの五ヶ月間は久留米第四八連隊に短期現役兵として入隊。除隊後、14年9月から正式に念願の教師生活を送ることになった。が、戦時色はいよいよ強まり、16年12月、太平洋戦争に突入。本格的に戦時体制に入ったことで、学校の授業は当分の間、そつちのけの状態となつた。

生徒と一緒に農家で稲刈りをしたり、軍需工場等で勤労奉仕をしたりの毎日。生徒にとつても、教師にとつても戦時色一色の毎日であつた。高等科担任教師である私にとつて

橋本秀雄

